

# 臨床社会学の方法

## (1) 暗黙理論

中村 正

### はじめに

「社会臨床の視界」と題して12回続けた前回までの三年にわたる連載はそれなりの分量となった。備忘録風に社会臨床の視界に入るものをその時々に関心にあわせて書いていた。いつまでもそれにお付き合い願うのは気が引ける。また、前回までのものをできれば一冊の書物にしたいと思い編集作業に入ることにした。そこで、今回から第2期として新しい表題で連載したいと思う。といっても書いている私はそんなに新しいことがいえるほどに変化したわけではないので、多少のアレンジ程度のことにはすぎないが。

社会臨床は個人の諸課題の背景にある社会問題を対人援助の視野に取り入れるということを基調にしていた。もちろんこうしたアプローチはどんな場合でも必要で、心理臨床や対人援助が何かしらの被害性（加害との関係性も含む）、苦難、ままならない事態となることを背景に生成することが多く、社会への問いは欠かせない。今後もこのスタンスは変わらない。

社会臨床の視界はものの見方のあれこれを記していたが、臨床社会学の方法として概念それ自体を詳述していきたい。臨床実践に社会的な知見を応用し、臨床の社会性を問い、社会問題を背景にした支援・臨床とする際の方法論の整理に役立てたいと考えている。いわば「臨床社会学キーワード」である。今回は暗黙理論というのを取り上げてみる。それは加害者臨床論のなかで逸脱行動や触法行動をした人たちの行動を支えていた内的な認知のモデルを探るための言葉である。

### 1. 暴力はコミュニケーションであると 考えている

ドメスティック・バイオレンス（DV）、虐待、ハラスメント、性犯罪等の対人暴力の加害者臨床で出会う男性たちのものの見方、身体感覚や行動の仕方は独特である。いくつか典型的な言い方がある。「暴力はコミュニケーションである」が代表的である。信念のようにしてとりついている意識である。この考え方をもとに暴力を振るい、

行動し、生きてきた。彼らにとっての真実であり、自らの行動と実践を導く内なる規範である。これを暗黙理論という。暴力を振るうという意思をもち、相手を選択し、現に暴力を行使しているの、それが正しい、必要であるという確たる理論のように位置付いている。この言い方が首尾一貫した信念として成り立っている過程をおってみたい。

まず、暴力は行動化しているの、一種の非言語的コミュニケーションとして彼らのなかでは理論化されている。堅苦しい言い方なので翻訳して「からだのことば」とグループワークや面談では説明している。よく似た言い方に「身体で分からせる」というのがある。これと類似の、暴力ともなりうる直接行動をとまなう非言語的コミュニケーションは男性性の領域に数多くある。体罰やしごきは当然のことのようにある。それは教育の一種としても観念されている。結果がすべての仕事ができるかどうか、アルコールを入れて胸襟を開くつきあいは身体的共存を意味する連帯の儀式でもある。ドラマ、漫画やゲームにも暴力のストーリーがある。攻撃的なスポーツも好きだ。女性とのつきあいをめぐる遍歴の武勇伝もある。すべて「からだのことば」として男性同士の結託（これを男性同盟という）ができやすい非言語的コミュニケーションとなっている。私はこれをメンズトークと名付けた。

このトークの内容には攻撃的な行動、暴力の実践が体験として挿入される。暴力と親和性の高い生活がうかがえる。もちろん暴力を描いたメディアの内容が現実生活に直接影響を与えることはない。あくまでも男性性との親和性が高いストーリーがそこ

にあるだけである。暴力を肯定する男性は自己の信念をいっそう強化してくれるストーリーを好み、よりコアな信念としてメディアを活用して生きる。あくまでもその意味づけの仕方を学習していく。

多くの男性は被暴力体験を有している。暴力を嫌悪し、批判するのではなく、無視するかそれを乗り越えてきた自分を肯定的に思っている。人によっては自信の源泉ともなっている。抵抗する男性性ともいえ、自尊心をつくる。こうして暴力が人生のなかでは有意味なこととして組み込まれていく。大切なことは、暴力が人と人との関わりあいのひとつの要素としても観念されている点である。

もちろんそんな男性ばかりではなく暴力を嫌悪する男性もいる。しかし暴力を嫌悪する男性がいたとしても、その体験にはふたをするように男性性が作用する。弱音を吐けないからだ。

また、攻撃性のわかりやすい表現である暴力は生きるエネルギーになっているので、脱暴力のグループワーク等でそれが除去されていくと、短期的に彼の男性性は空虚感に満ちていき、落ち込むことがある。暴力的ではない男性性のモデルがないからだ。それほどに男性性の形成の歴史には暴力の肯定、競争の価値、克己心の発揚、業績づくり、弱音への嫌悪等が満ちている。

ライフサイクルのなかでみてみよう。コミュニケーションとして「からだのことば」が前景化することは男性の人生にはたくさんある。思春期の頃、少年たち同士の仲間意識と連帯のためのやんちゃな行動様式、青年期には学業、仕事の業績、異性をめぐる競争がある。成人すれば男は七人の敵がいるというような職場の環境、中高年期の

稼ぎへのプレッシャー、高齢期男性のコミュニケーション下手と対人関係の悪さや孤立傾向等が男性性と重なる。

ライフコースの諸相において男性の「からだのことば」としての非言語的コミュニケーション状況を切り取ると、暴力、競争、パワー、業績、連帯等の男性的価値に満ちている様相がみえてくる。そして、子育てもせず、介護も女性まかせ、健康診断というセルフケアさえ積極的でない。全体として「ケアからの（自己）疎外」といえる。脱暴力のためには他者への配慮が不可欠となるが、男性性はこの点において負の作用となる。他者への配慮がケアの真髄であることに鑑みると、男性のケア力の衰退は暴力を否定しないことと相関があり、男性にとっての他者の存在の意味（あるいは不在の意味）の根底を問うことと脱暴力の課題は根底においてつながる事項となる。

他にも、友情の確認のために喧嘩があるといえはわかりやすいだろう。暴力を振るいあえるほどに親しいという意識が醸成される。羽目を外して一緒に飲み歩き、セックス、ギャンブル、アルコールという欲望世界を一緒に涉猟する仲間に言葉はいらないと思っている。スポーツも同じような機能を果たす。男性の生涯発達の過程にあるストーリーのなかでも同性同士の関係性は無視できない。ここで見られるテーマはホモソーシャル関係である。

暴力、興奮、連帯、共在をとおして身体介在的な、非合理的で感情的なもの、エネルギーを高めてくれること、パワー感覚を満たすことが非言語的コミュニケーションに託される。「からだことば」を共有し、そこに身を投じることこそが大事となる。暴力をはじめとした「からだのことば」は攻

撃性やエネルギー源である「身体文化」として存在している。それは「暗黙の文化／沈黙の文化」として男性性の発達過程に刻み込まれていく。

こうした男性性が性に合わない男性はまた別の男性性をまといながらこの男性中心社会を生きることとなる。男性性はたえず masculinities と複数形で表現されるべきなのはこうした事情による。暴力はコミュニケーションであるとする暗黙理論は男性にとってはきわめて大切な生き方を示唆する言語表現である。

## 2. 俺は正義であるという意識があり、矯正のための暴力なのだと考えている

親密な関係性における暴力は腕力としては弱い者にむかう。これは彼らの男性性意識に乗りかかりながら考えても卑怯なやり方である。マッチョ意識からいっても、弱い者をかばうことこそが男性性意識であるはずなのだが。にもかかわらず弱い者に暴力がむかうので、これを支える意識はまた別の回路で暗黙理論となっているはずである。暗黙理論はそれなりに一貫性を保つ必要があるからだ。

この暗黙理論は男性にとっての正義の感覚が舞台である。正義感あふれる男性は糾すべき行為としての他者の不正が目につく。それを矯正しようとして、まるで警察官であるかのごとく強力を用いる。親としては子どもへの懲戒となる。リーダー然とした態度でもある。自分なりの法と秩序がある。

とくに私的領域としての家族にあって、そこは俺のものだと観念し、女性や子どもはリーダーに従うべきだし、家のなかの秩序維持の仕方も俺が決める。そして強く育

てるための厳しいしつけは懲罰の範囲内である。それを守れないからこそ暴力を用いるという。虐待という意識はでてこない。否認する。制裁という権力的な意識に基づいている。暴力と虐待を俺に振るわせるようなお前らが悪いと思っている。こうなると暴力を振るう理由はどこにでもあり、被害者からすると暴力は遍在している。暴力を回避するために被害者は加害者の目線でのことを考えるようになり、自分で自分を点検する理想の被害者に仕立て上げられていき従順な人格となる。

この暗黙理論にはジェンダー秩序や性別役割の現実が動員される。女性は男をたてて当たり前という。家事、育児は妻の仕事なのでそれが主人の思うようにはうまくいっていないのだから、当然、叱責の対象となる。俺の仕事先では事がうまくいかないと上司に厳しく指摘される。それを家でやっているだけだと思っている。それくらいの暴力は感受すべきだろうという。ましてや妻にあれこれ指図されたくない。口論をとてもしやがる男性たちである。口では負けるからだという。そもそも口論になったのは妻が家のなかでやるべきことをやっていないからだという図式もある。

この女性観はさらに感情的なまとめ役としての妻役割、受けとめてくれるだろう母役割という固定的な観念にも支えられている。別言すると、男性はケアされることを期待している。世話して欲しいとも思っている。そうはいつでも俺はお前たちのことを思っているのをついつい厳しい言い方になると内心では思っている。愛の鞭のようにして暴力がでてくるのは正義感のなせるところだと考えている。

また、暴力ではないが、妻や子どもの動

向を監視することもある。妻の外出を点検し、同窓会や職場の懇親会や女子会に出かける等の社会的な交際に口をだし、また、子どもの友人関係をチェックすることもある。なわばりの意識である。これも同じく私的領域の主人としての意識の表現である。

この暗黙理論は、女性や子どものことを第一に考えていることの表現なので、保護するという役割に付随する特権としての統制という意味である。親密な関係性は私的領域のことなので、暴力はそれぞれ甘受すべきである。それを上回って保護役割を發揮しているので、第三者にあれこれ言われたくないし、家族のもめ事は家族同士で解決すべきであり、外部に持ち出すことは許されないとして、閉じた考えをする。

男性の暴力は非言語的コミュニケーションなので行動化、身体化されていることから話し合いはそもそも無理であるし、口論になって暴力化するのだから被害者は外部に相談するしかない。転倒した家族問題の定義であり、どうすればいいのか被害者は動きが取れなくなり、ダブルバインドとなる。

### 3. 共生体としての家族は私的領域であり、家族は他者ではないと考えている

頭が真っ白になっていた、アルコールが入っていた、むしゃくしゃしていた、そもそも冷静になれない気性なのだ、俺の育った家もそうだった等ということがあつた。誰かがそばにいてこれを受け止めなければならぬと考えている。

思春期や青年期の頃、同じようにして言葉にならないむしゃくしゃする気持ちを親

にぶつけていたが、それと同じような感覚なのだろう。甘えのなせるところである。大人なのだから行為の結果の責任はすべて負う義務がある。責任能力はある。それが証拠に、頭が真っ白になったからといって家の外で無差別に暴力をふるっているわけではない。アルコールを飲んだらどうなるのかについては責任がある。むしゃくしゃしていても決して同僚を殴らないだろう。気性のせいであればどうして妻子や特定の人にだけ暴力がむかうのか。さらにこれらを説明しなければならぬことは眼中にはない。そこで説明が終わっている。個人の責任が減退している。

同じような事態に陥っても暴力を振るわない男性は多い。男性の自然な性なのではない。男性のもつ本来性でもない。ではどうして彼は暴力に至るのか。思考停止状態で自動的な反応のようにして暴力が出てくるので、感情に責任はもてないといわんばかりである。

しかし、冷静に考えればこの暗黙理論は矛盾している。同じようなことを他人にするとそれは責任としてどんな理由があれ、正当防衛であったにしても暴力として裁かれる。親密な関係性にあってはそれが許されるという、つまり他者でない人として家族のメンバーをみている。境界がそこにある。関係性の認識の区別も含んだ暗黙理論となっている。暴力を振るう人にとっての他者の成立にかかわる基本的な認識がこの暗黙理論からうかがえる。暴力があっても当然のように、家族だから、夫婦だから、親子だからという自動思考が作動している。恋人もここも入れることができる。共生体感情に根ざした暗黙理論である。

#### 4. 加害者には独自の被害者論がある

アーロン・ベックのうつに関する認知の歪み論は白黒思考等を取りだし、認知療法として体系化されている。それは確かに認知の歪みなのだが、それを「個人の理論」として把握することも提案されている。認知の歪みという定義よりは「個人の理論」とした方が当人の主体性や回復への努力が見えやすい。脱暴力への主体性を発揮しやすい名付けがいいと思う。

司法臨床心理学者のトニー・ワードは犯罪者の更生理論（リハビリテーション）の新機軸を提案しているが、その過程で性犯罪者の暗黙理論を考察している。たとえば、子どもらしい行動が別様に意味づけられている。人の膝の上に座る、下着をみせて遊ぶ、加害者に抱きつくなどの行動が性的に解釈されていく。子どもが泣くことでさえそれは子どもが関心をもって欲しいという願望であると解釈されていく。加害者の隣に座ることが愛着をもとめている行為だと意味づけられていく。子どもが私を誘惑した、セックスを望んでいた、子どもは傷ついていない、子どもは性を探索しているとして子どもをみている。女性のフレンドリーさは性的な欲望があるものとして解釈されていく。子どもが多くいる環境も好む。子どもに関わるボランティアが好きである。性犯罪者の意識のなかには「ナンパして一緒になる時間をもったのだから強引なセックスは合意のうえだ。」といい、責任はないといいはることがある。特定の子どもや女性像をもって日常の接触が行われ、犯罪へと展開されている様子を暗黙理論にもとづく日常実践としてトニー・ワードは描く。

これは加害者のもっている暗黙理論が台

本のようにして認知だけではなく行動をも導いていることが示されている。暴力はコミュニケーションである、あるいは葛藤や問題を解決する手段であるという人生の台本、そして日々の快樂となって子どもや女性と接触しつつ犯罪を準備している日常実践がある。逸脱行動や触法行為を誘導するための他者非難、過小化、否認もある。

加害者は心の中で特別に想定した女性と子どものイメージをもっている。暗黙理論からすると男性たちは加害者ではなく被害者だと思ふ場合もある。被害者理解とか被害への直面化という課題が加害者臨床のなかでも難しいとされるがそれはこうした暗黙理論を有しているのです、その是正から始めなければならないからである。

\* Tony Ward, *Sexual offenders' cognitive distortions as implicit theories, Aggression and Violent Behavior, Vol.5. No.5, pp.491-507,2000.*をもとにこの節では紹介している。

## 5. DVの暗黙理論を探る

加害者臨床で出会う男性たちには暴力が日常化していた原家族があり、それはDV目撃からスタートする。暴力の再生産のはじまりである。さらに奇妙な事態として、暴力があっても家族は続く。そうになると、愛情と暴力が同居していると学習する。親密な関係性における暴力に寛容で、学校での体罰も許容的であり、社会全体にメンズトークが広がっているのです、全体として、家族が社会のもつ「暴力の文化」の温床となり、暴力的な個人としてのパーソナリティをつくる。

DVと虐待が対人暴力全般にとって重大

な位置にあると思う。それは上記の理由による。DVをささえる暗黙理論を取り出ししておくことは脱暴力にとって意味がある。

DVの本質理解については論争がある。Violence against Women(VAW)として定義する理解と、Inter Personal Violence(IPV)という定式化は力点が異なる。IPVは関係性における葛藤の処理過程に問題があるとす。他方で、VAWという定式化はジェンダー暴力を強調する。VAWの暗黙理論はジェンダー論的であり、被害者データをもとにしてプログラムがくまれていく。それは加害者臨床ではなく心理教育あるいは矯正教育となる。男性は一律に家父長制的な暗黙理論をもつという仮説である。あくまでも男性的特権による認知の歪みが認知再構成の対象とされる。VAWのアプローチで世界的に引用されている「ダルスモデル」(ミネソタ州のダルスという町で展開された加害者向けプログラム)において、男性は社会的ジェンダー役割、つまり男性的特権に屈服してそれを内面化しているのだとする仮定があり、男性の暗黙理論をこのように想定する。このモデルは3つの固定された信念を想定している。性別役割についての堅い信念、統制(コントロール)する必要性、男性的特権である。ジェンダーモデルなので個別的な認知特性は説明できない。

しかしこれはマクロすぎるので、加害者臨床にはならないという批判(たとえばドナルド・ダットン『虐待的パーソナリティ』明石書店、中村正監訳、2012年)がある。そのなかで形成されたIPVというアプローチが支持する暗黙理論は愛着の歪みに注目する心理臨床的な見地である。個々人の人格的特性にも注目し、虐待するパーソ

ナリティについて確定し、心理教育ではなく、加害者臨床としての実践を根拠づけていく。

最近ではこれらが統合されつつあり、マクロアプローチとして VAW の成果を継承しつつも、個人を把握する臨床心理学的概念が導入され、リスク要因となる変数も追加され、ジェンダー暴力論からの修正が試みられている。そのために、社会臨床の視点としてはジェンダーという社会的な規模での認知の偏向があることと、それでもすべての男性が暴力をふるうのではないということの整合的な説明をしていき、それを加害者臨床としてまとめあげていくことが有益だと思う。複数ある男性性のなかからどのようにして虐待するパーソナリティが生成し、加害行動へとすすみ、どんな暗黙理論を用いて暴力を振るうのかという経路の分析が大切となる。その上で、セミオーダーメイドされた加害者臨床のプログラムが組成できる。今回取り上げた暗黙理論を理解することはこうした実践を展開する上で不可欠の視点を提供する。いじめやハラスメントへの対応も同様である。

## おわりに

DV を子どもの面前で行うとそれは虐待になる。思春期青年期の親に向かう暴力がさらに親の高齢化で続くと高齢者虐待に姿を変える。夫が妻を介護している際の暴力は DV であるが高齢者虐待の養護者支援へとニーズを変える。若年の恋人同士の暴力（デートバイオレンス）には DV と異なる暗黙理論がある。いじめやハラスメントも同じようにそれを合理化する暗黙理論が取り出せる。

それぞれのタイプごとに暗黙理論の形成過程があるが、共通点も浮かび上がる。第1にさらに検討していきたいのは、愛着経験と「心の理論」（他者の心を理解する関係性認識の発達についての理論）の発展の関係、男性にとっての他者への関心を回復させる取り組みである。トニー・ワードらの研究によれば、性犯罪者の多くは情緒不安定のある家族に育っている。安全ではない家族である。「心の理論」の獲得が遅延させられている環境にいたといえる。選択的小児性愛者は不安を元に暗黙理論を組成しており、対人関係ストレスを感じやすく、社会的拒絶にも会いやすい。そうした環境を自ら構成している。

親密な関係性における暴力は同性同士の関係性をみないとみえてこない。男性同盟、身体文化、沈黙の文化・暗黙の文化、からだのことば、非言語的コミュニケーション等をもとにして男性性の視点から見ると、実に多面的な暴力肯定の暗黙理論がみえてくる。

加害者臨床はこうした暴力を支える暗黙理論を明確にし、それとはまた別の脱暴力を可能にする暗黙理論をつくることである。対案となる暗黙理論の創造というセラピストの役割はナラティブアセラピーの機能そのものである。暴力を含まない、むしろ脱暴力や反暴力を導く男性性の形成という社会臨床的な物語も社会のなかでは必要でありやりがいのあるテーマとなっている。

なかむら ただし